羽昨工高新聞

第１４２号

発行所
石川県羽咋市西釜屋町
石川県立羽咋工業高校
TEL (0767) 22－1193
編集兼発行
羽咋工高生徒会新聞部

第５７回卒業式挙行

祝　卒　業

心のもちかた

校長　稲垣　裕

京セラやＫＤＤＩの創業者で、日本航空の再建を成し遂げた稲盛和夫氏は、著書『心。一人生を意のままにする力一』のなかで、「すべては〝心〟に始まり、〝心〟に終わる」と述べている。以下は、そのあらましである。

稲盛氏は少年期から社会に出るまで挫折と苦悩、失意の連続で、中学受験には二度失敗、大学受験をしても希望の大学へ行くことは叶わず、就職試験も思うようにならなかった。そして京都のあるメーカーに就職したが、会社は経営が行き詰まっていた。しかし、どんな劣悪な環境であってもできる限りの仕事をやってやろうと肚を据え、研究室に泊まり込むほど研究開発に没頭したことにより成果を上げ当時世界的にみても先駆的なファインセラミックス材料の合成に成功できたのである。能力が向上したわけでもなく、素晴らしい環境が与えられたわけでもない。考え方を改め、心のありようを変えただけで人生の流れが変わったのである。

さて、純粋で美しい心をもって生きる人にはそれにふさわしい、豊かで素晴らしい人生が拓け、自分だけが良ければいいという狭量な思いや、人を蹴落としてでも自分だけが利を得ようとする邪な心をもつ人は、一時的に成功を収めることはあってもやがては没落した人生を送ることになる。中でも人が持ちうる、もっとも崇高で美しい心は「他者を思いやるやさしい心、ときには自らを犠牲にしても他のために尽くそうと願う心」である。すなわち「利他の心」であり、「他を利する心」なのである。ただ「やさしい思いやり」の心だけで事が旨く運ぶわけではなく、いかなる困難にも負けず、果敢に突き進む強い意志、何があっても成し遂げるというすさまじいまでの熱意が必要であり、これらはやさしい「利他の心」に裏打ちされてこそ強いものになる。また、人には、自分さえ良ければいい、人を押しのけてでも自らが得をし、幸せになりたいという「利己の心」も存在している。この二つの心が同居し、せめぎ合っている。私たちは、「利己の心」をできるだけ小さくし、「利他の心」が占める割合を大きくしていくことが心を磨き、人格を高めることにもなるとのことである。

まもなく卒業する三年生は、就職や進学により、これまでと違う生活が始まる。慣れない生活には多少の不安はつきもの。時には不平や不満も出る。そんなとき、何かに没頭することが一つの解決策になることもあるということを覚えておいて欲しい。そして、「やるぞ」と肚を据え、目の前のこと、仕事や授業に没頭する。これによって新しい世界が拓けていくことを期待して欲しい。

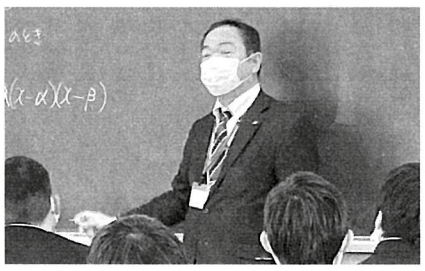
また、一年以上続いているコロナ禍で、感染者や濃厚接触者、医療従事者への差別や偏見、誹謗中傷があると聞く。私自身、本校生や教職員、自分自身や家族への感染に対する不安は大きいが、こんなときこそ徹底した感染防止策はもちろん、心のもちかたが大切で、感染者や濃厚接触者等に対して、「やさしい利他の心」で「思いやり」を持ち、慎重な発言と行動が求められているのではないか。

最後に、チーム羽工の更なる活躍を祈る。

感謝

教頭　中谷　義宏

私は昭和五十八年（一九八三年）に大学を卒業し、二十二歳で初任者として中学校に勤務しました。その後、商業高校、普通高校、教育委員会などで三十八年間教員を勤め、この春、定年退職となります。最後の学校となる羽咋工業高校には二年間お世話になりました。理科系の人間なので若いときからもの作りには興味があり、工業高校を経験したいと思っていたので人事異動を知ったときは通勤距離が長いという不安よりも期待の方が大きかったことを覚えています。



羽咋工業に来て、初めて経験し、感動したことが多くあります。まず、四月八日の新任式・始業式で歌った校歌の声の大きさです。体育館全体に響く大きな声で堂々と歌う生徒諸君には初日から感動しました。今年度は新型コロナの影響で歌うことはできませんでしたが、解禁になればぜひ、この校歌は続けてほしいと思います。次に資格・検定の取得に一生懸命な姿です。電子機械科の「旋盤」や建築コース「建築大工」などの真剣な練習風景を見るのがとても楽しみでした。生徒の中には部活動の練習を終えてから参加する人もいました。指導する先生方も熱心で大変頭が下がりました。さらに就職を中心に進路決定に強いことにも驚きました。ほとんどの生徒が一回目の就職試験で内定をもらい、運悪く内定しなかった人も二回目で全員が決まっています。履歴書に書く資格などの個数、内容が普通高校と全く違います。その他にもマイコンカーやロボットなど工業科でしか見ることができないものも多々ありました。

立派な人材を輩出

羽咋工業は「地域に貢献する立派な人材を輩出する。」ことを使命としていますが、ありがたいことに地元企業や同窓会などの協力体制がしっかりしており、逆に外部の多くの人に支えられていることを強く感じました。少子化の中、学校が企業、地域、同窓会、保護者などと一体になり、感謝の気持ちを忘れず、活動を続けていくことが本校の発展につながるのではないかと思います。

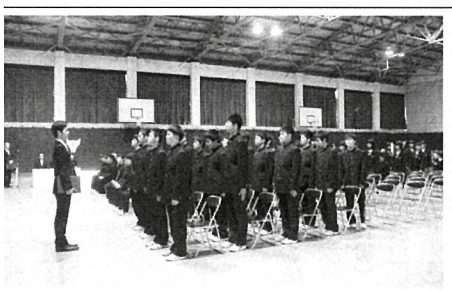
最後に一言。

「羽咋工業高校はいい学校です。」

ありがとうございました。

三年生を送る会

令和三年二月十日（水）に三年生を送る会が開催されました。コロナの影響で三年生は第一体育館で、一・二年生はその様子や映像を第二体育館で見ました。まず稲垣校長から三年生にメッセージが送られ、次に在校生代表の生徒会長江下さんから、三年生代表の岩城さんに送られました。記念品は印鑑が送られ、岩城さんから感謝の言葉が述べられました。次に生徒会執行部の企画がおこなわれ、会場は和やかな雰囲気で進行していきました。企画後、生徒会執行部が三年生のために製作した思い出の動画を放送しました。三年生は当時を懐かしみながらその映像を見ている姿が印象的でした。最後に三年生を代表して山口さんから感謝の言葉が述べられ閉会となりました。



退職にあたり一言

建設造形科　袖野　貴義

教師を目指したきっかけは単純なものであった。高校二・三年生の担任の先生がすごくかっこよく見えた。よく声を掛けてくれ、励ましてくれた。女性の体育の先生だったがいつもセブンスターを口にくわえていた。後で知った事だが元槍投げ日本一だったそうだ。

また、学園ドラマが流行っていて、生徒達と一喜一憂する姿にも胸を打たれた。そんな理由で教師になりたいと思った。

本当は数学の教師になりたかった。数学は中学高校と常に上位だった。数学を好きになったのもある先生の存在があった。しかし、世の中は甘くなかった。受ける大学の数学科は受からず、「理系ができるなら工業系にしたら」という叔父の勧めで工業を選んだ。だが何をやればよいか全くわからなかった。祖父が当時の建設省に勤めていた。叔父が建築会社を営んでいた。たったそれだけの理由で「建築」を選んだ。

大学四年生で教員採用試験を受けた。受からなかった。そこで建設会社に入社することにした。初めての現場は小学校の増築工事で確か一億二千万円の工事だったと記憶している。見るもの全てが新鮮で楽しかった。二年目二つ目の現場に入った。学校の改築工事だった。建物の解体から始め、新しい校舎を造っていく。本当に楽しかった。

だがふと思った。自分は教師になりたかったのではないか。学校を造るのではなくその校舎の中で働きたいと思っていたのではないか。もう一度だけ頑張ってみよう。会社には内緒で採用試験を受けた。やはり不合格だった。しかし、三月末に講師にならないかと県教委から連絡があった。今と違い携帯もない時代。たった四時間ほどで人生を決める決断をしなければならず、会社の上司に会社を辞すること。そして婚約者に教員になりたいと伝えた。結婚を二ヶ月後に控えていた。

初めての学校は定時制高校だった。生徒は十四人でいきなり担任だった。ある日クラスで授業をしていた時、「先生は俺らの事どう思っている？俺らはいろいろ事情があって昼仕事しながら夜ここに来ている。俺らの事もう少し知って欲しい」。授業を止めて一時間以上皆の話を聞いた。そこで教師は生徒の事を考えられなければならないと学んだ。

あれから三十五年が経ち定年を迎える。今まで生徒たちと一緒に笑ったり、泣いたりした思い出はとても多い。突然「先生元気してますか」なんてメールをくれる者。仕事関係で「先生！覚えてる？」と声を掛けてくれる者もいる。本当に教師になって良かったと思える瞬間である。この仕事を選んで正解だった。

最後に今まで私を支えて下さった諸先輩方、同僚の先生方に感謝。私の授業を聞いて、くだらない話に反応してくれた生徒たち。私に関わった全ての方々にお礼を申し上げ、再会まで暫しのお別れと致します。

難関　測量士補５人合格

本校の建設造形科土木コース三年の五名が測量士補試験に合格した。合格したのは表篤史さん、府中康太さん、前田優希さん、南美里さん、山岸大智さんでした。この資格は全国の合格率が約三十％の難関で、一九九五年の同科設置以来、最多の合格となった。十月に小松市木場潟でおこなわれた県高校測量技術コンテストでも南さんのチームが最優秀賞、表さんと府中さんのチームが優秀賞を受けており実力を発揮した。測量会社で働く人もいるため、今後は測量士の資格にも挑戦したいと意気込んでいました。

北陸中日新聞掲載記事

羽咋工高建設造形科　過去最多

羽咋市の羽咋工業高校建設造形科土木コース三年の五人が、測量士補試験に合格した。測量士補試験は、計画に処して測量をする国土地理院の測量士補に合格した羽咋工業高生徒の皆さん＝羽咋市で

格率が30・3％の一九九五年の同科設置の合格者数となった。合格したのは表篤史さん（府中康太さん（前田南美里さん、山岸月に木場潟（小松市）で開催された県高校測量技術コンテストでも南さんのチームが優秀賞、表さんと府中さんのチームが優秀賞を受けて実力を発揮した形表さんと府中さんは、測量会社で働いているという。「千里浜海岸が年中に生まれば」という叔父の勧めで工業を選んだ。だが何をやればよいか全くわからなかった。祖父が当時の建設省に勤めていた。叔父が建築会社を営んでいた。たったそれだけの理由で「建築」を選んだ。

火災警報器ポスター採用

本校建設造形科デザインコース三年青谷多瑛さんのデザインした、住宅用火災警報器（住警器）のポスターが採用されました。これは羽咋郡市広域圏事務組合消防本部が本校にデザインを依頼したものです。その中で青谷さんのものが採用され管内の店舗などに約百枚が配布され掲示されます。このデザインについて青谷さんは「よりリアルに見てすぐにわかる内容にしたかった。」ということでした。このポスターにはA3判で、寝室で火災警報器が鳴り、女の子が泣きながら驚く様子をコンピューターグラフィックスで表現した。青谷さんは「火災の恐怖が感じられるように思いを込めた。多くの人に警報器設置の大切さを知ってもらいたい」と話した。

同消防本部管内の住宅用火災警報器の設置率は昨年3月末時点で99・7％と、設置10年以上の警報器が増えており、点検や交換を呼び掛けなどに配布する。

青谷さんがデザインしたポスター　羽咋工高

2021年（令和3年）1月26日（火曜日）
北國新聞

羽咋工生が、ポスター　警報器重要性訴え

羽咋工高建設造形科の生徒がデザインした住宅用火災警報器の重要性を訴えるポスターが完成し、25日、同高で披露された。羽咋郡市消防本部が依頼した。

市住宅防火設置推進協議会の事業の一環で、3月の青谷多瑛さん（18）が手掛けたポスターが採用された。同郡市広域圏事務組合消防本部は100枚管内の店舗などに配布する。